

平成29年7月7日

各 位

公益財団法人 大同生命国際文化基金

2017年度（第32回）大同生命地域研究賞
受賞者の決定および贈呈式の開催

公益財団法人 大同生命国際文化基金（大阪市西区江戸堀1-2-1 理事長：喜田哲弘）
では、本年度の大同生命地域研究賞の受賞者を下記のとおり決定いたしました。

つきましては、贈呈式を以下のとおり開催いたします。

受賞者ならびにこの賞に関する資料を添付いたしますのでご覧ください。

記

1. 贈呈式

日時：平成29年7月21日（金）午後2時

場所：一般社団法人 クラブ関西

大阪市北区堂島浜1-3-1 電話：06（6341）5031

2. 受賞者

1) 大同生命地域研究賞（副賞300万円ならびに記念品）

○京都大学 名誉教授

阪本 寧男 氏

2) 大同生命地域研究奨励賞（副賞100万円ならびに記念品）

○津田塾大学 学芸学部 国際関係学科 准教授

小島 敬裕 氏

○京都大学大学院 アジア・アフリカ

地域研究研究科 准教授

高田 明 氏

○筑波大学 人文社会系 准教授

ティムール ダダバエフ 氏

3) 大同生命地域研究特別賞（副賞100万円ならびに記念品）

○中部大学 名誉教授

畑中 幸子 氏

以上

照会先：公益財団法人 大同生命国際文化基金 事務局（市村）

電話 06（6447）6357 / Fax 06（6447）6384

大同生命地域研究賞について

1. この賞を設けた趣旨

大同生命国際文化基金は、大同生命保険相互会社(当時)の創業80周年記念事業として、外務大臣の認可により1985年3月に設立された財団法人であります。その目的は「国際的相互理解の促進に寄与する」こととし、そのためいくつかの事業を行ってきました。

この賞は、「地球的規模における地域研究」に貢献した研究者を顕彰するもので、様々な地域の人と文化に対する理解を究極の目的としている点で、本財団の設立目的と一致します。それはいわば国際的相互理解を考える上で最も基礎的な部分を担うもので、医学に例えれば臨床医学に対する基礎医学のような関係にあたります。こうした理解に立ち、関係学界の協力を得て、この賞を創設しました。

2. 対象とする地域

アジア、アフリカ、中南米、オセアニア（ただし、発展途上地域または周辺・辺境地域）。

3. 賞の内容

この賞は、次の3部門で構成されています。

(1) 大同生命地域研究賞

多年にわたって地域研究の発展に著しく貢献した研究者1名に対して、賞状、副賞300万円ならびに記念品を贈呈するものです。

(2) 大同生命地域研究奨励賞

地域研究の分野において新しい展開を試みるとともに、今後さらに活躍が期待される研究者3名に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

(3) 大同生命地域研究特別賞

対象地域を通じて、国際親善、国際貢献を深める上で功労のあった者1名に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

4. 選考

- (1) 選考については、本財団が委嘱する選考委員で構成する会議により決定されます。2017年度の選考委員は次の5名です。

(五十音順)

早稲田大学人間科学学術院 教授	井上 真 氏
国立民族学博物館 教授	印東 道子 氏
日本女子大学文学部 教授・同大学図書館 館長	臼杵 陽 氏
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 理事	小長谷 有紀 氏
名古屋外国語大学世界共生学部 教授	島田 周平 氏

- (2) 候補者の推薦については、全国の大学、研究機関等の研究者に推薦委員を委嘱し、推薦委員より書面による推薦を受けることを原則としています。

以上

2017年度

大同生命地域研究賞 受賞者一覧

◆大同生命地域研究賞

「アフロ・ユーラシア地域における栽培植物の起源・変異・伝播と
食文化の解明への貢献」に対して

○京都大学 名誉教授

さかもと さだお
阪本 寧男 氏

◆大同生命地域研究奨励賞

「東南アジア上座仏教文化の地域間比較研究」に対して

○津田塾大学 学芸学部国際関係学科 准教授

こじま たかひろ
小島 敬裕 氏

◆大同生命地域研究奨励賞

「南部アフリカのサンにおける社会化と社会変化に関する研究」に対して

○京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授

たかだ あきら
高田 明 氏

◆大同生命地域研究奨励賞

「中央アジア地域における社会主義後の政治、アイデンティティ、
社会の変容に関する研究」に対して

○筑波大学 人文社会系 准教授

ティムール ダダバエフ 氏

◆大同生命地域研究特別賞

「オセアニアにおける長年にわたる文化人類学的調査研究と
地域住民支援の功績」に対して

○中部大学 名誉教授

はたなか さちこ
畑中 幸子 氏

2017年度
大同生命地域研究賞

阪本 寧男 氏
(京都大学 名誉教授)

略 歴

阪本 寧男（さかもと さだお）

1. 現 職：京都大学名誉教授

2. 最終学歴：アメリカ・ミネソタ州立大学修士課程終了（1962年）

3. 主要職歴：1954年 国立遺伝学研究所研究員

1974年 京都大学農学部助教授

1984年 京都大学農学部教授

1994年 京都大学農学部定年退職

1994年 京都大学名誉教授

2003年 退職

現在に至る

4. 主な著書・論文：

- ①『雑穀博士 ユーラシアに行く』昭和堂、2005年
- ②『民族植物学からみた農耕文化』農文研ブックレットNo. 15. 農耕文化振興会、1999年
- ③『アオバナと青花紙ー近江特産の植物をめぐってー』（共著）サンライズ出版、1998年
- ④ Origin and Ethnobotany of Glutinous Perisperm Starch Found in a Species of Grain Amaranths, *Amaranthus hypochondriacus* learning L. Intercultural Studies, Ryukoku Univ. 1:124-133 1997
- ⑤ Glutinous-endosperm Starch Culture Specific to Eastern and Southeastern Asia. Refinding Nature: Ecology, Culture and Domestication (Ellen, R. and K. Fukui eds.), Berg Publishers, Oxford:215-231. 1996
- ⑥『ムギの民族植物誌ーフィールド調査からー』学会出版センター、1996年
- ⑦「半栽培をめぐる植物と人間の共生関係」『講座 地球に生きる 4. 自然と人間の共生』雄山閣、17-36. 1995
- ⑧「雑穀とモチの民族植物学」『日本文化の起源ー民族学と遺伝学の対話ー』講談社、199-223. 1993
- ⑨「スペルタコムギの収穫法をめぐって」『農耕の技術と文化』、集英社、100-117. 1993
- ⑩『インド亜大陸の雑穀農牧文化』（編著）学会出版センター、1991年
- ⑪ The Cytogenetic Evolution of Triticeae Grasses. Chromosome Engineering in Plants: Genetics, Evolution Part a (P. K. Gupta and T. Tsuchia eds), Elsevier:469-481. 1991
- ⑫『モチの文化誌ー日本人のハレの食生活ー』中央公論社、1989年
- ⑬『雑穀のきた道ーユーラシア民族植物誌からー』日本放送出版協会、1988年
- ⑭「日本とその周辺の雑穀」『日本農耕文化の源流』日本放送出版協会、61-106. 1983年
- ⑮「穀物における貯蔵澱粉のウルチーモチ性とその地理的分布」『澱粉科学』29(1). 1983年
- ⑯ Genetic relationships among four species of the genus *Eremopyrum* in the tribe Triticeae, Gramineae. Memoirs Coll. Agric., Kyoto Univ. 114:1-27. 1979

- ⑰ Patterns of phylogenetic differentiation in the tribe Triticeae. *Seiken Ziho* 24:11-31, 1973
- ⑱ Intergeneric hybridization between *Eremopyrum orientale* and *Henrardia persica*, an example of polyploid species formation. *Heredity* 28:109-115, 1972
- ⑲ Collection and preliminary observation of cultivated cereals and legumes in Ethiopia. *Kyoto University African Studies* 7:109-115, 1972
- ⑳ *Arisaema triphyllum*, Jack-in-the-pulpit, in Minnesota, especially at the Cedar Creek Natural History Area. *Proc. Minnesota Acad. Sci.* 29: 153-168. 1962

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考 : 1964年 農学博士 (京都大学)

業績紹介

「アフロ・ユーラシア地域における栽培植物の起源・変異・伝播と
食文化の解明への貢献」に対して

阪本寧男氏は、アフロ・ユーラシア地域における栽培植物、とくに雑穀の起源・変異・伝播およびその食文化の解明に多大な貢献をした民族植物学研究者である。

フィールドワークの魅力にとりつかれたのは1966年のトランスコーカサスの調査であった。そして、1967年にエチオピア高原を訪れ、アフリカ独自の穀類であるテフの畑に佇んだ時に、その「素朴な美しさ」にとっても強く惹かれたことが、雑穀研究へ傾倒する一大転機になったという。1972年に新設された京都大学農学部植物生殖質研究施設の栽培植物起源学部門の助教授に採用されると、冬作のコムギ類と夏作の雑穀を対象として一年中解析的な研究に従事した。同時に、日本およびその周辺地域、東南アジア、インド亜大陸、ユーラシア西南部、ヨーロッパ、アフリカの各地に残る貴重な在来品種を収集し、それらの系統を保存し、古老から伝統文化について聞き込むフィールドワークを精力的に実施した。

当時、経済価値が認められない雑穀のような栽培植物にはまったくと言ってよいほど関心が払われることはなかった。それに対して、阪本氏はそのような栽培植物こそ、われわれの生活にもっとも強く結びついた、もっとも大切な「文化財」であるということを強調した。栽培植物の地方品種を収集する際には必ず、その栽培植物の地方名、栽培様式、利用法など特定の品種のもっている文化的情報についても、できるだけ完全な形で収集し保存してゆく姿勢を貫いた。つまり単に有用な「遺伝資源」の系統保存としてのみ位置づけるのではなく、「文化資源」として栽培植物の地方品種とその文化的情報をセットで保存していく民族植物学的フィールドワークにより、新たな栽培植物研究の扉を切り拓いたのである。

阪本氏の主要な研究成果としては、(1)「雑穀のきた道」とキビ・アワの地理的起源の解明、(2)モチ性穀類の分布とその民族植物学的意義とくに「モチ文化起源センター」があげられる。

「雑穀のきた道 (ミレット・ロード)」、すなわち雑穀の栽培起源、系統分化ならびに伝播ルートはどのようなものだったのか。阪本氏は、精力的に収集した雑穀のサンプルの解析に、伝統的な調理法や利用法に関する情報を合わせて、キビ・アワの地理的起源についての新説を提出することに成功した。

アフガニスタンとインドには遺伝的に未分化と思われる地方品種群が分布していること

から、アワは従来考えられてきた中国北部起源の雑穀ではなくて、アフガニスタンからインドにかけての地域で栽培化されたと考えた。またキビについては、キビにきわめて近縁の雑草が中央アジアを中心に、東は中国東北部から西は東ヨーロッパまで広く分布しており、この植物がキビの祖先野生型と考えられる可能性が高いことから、キビもアワと同様の地域で栽培化されて、この地域より、遺伝的に分化しつつユーラシア大陸を東西に伝播し、各地域における長い栽培の歴史の過程で各地に独自の地方品種群が成立していったとする、キビ・アワの地理的起源地域に関する新しい仮説を提出した。

また阪本氏は、キビやアワの伝統的な調理法についても丹念な記録を積み重ねたことにより、アジア東部においては粒食が主なのに対して、東南アジア、インド以西からヨーロッパまではひき割り粥や粉食が主であり、ユーラシアでも東と西では調理法に変異のあることを明らかにし、これがキビとアワの起源地域を推定する一つの傍証となることを提示した。

次に、モチ性穀類の分布についてである。アワには種子の内胚乳に貯蔵されたでんぷんにウルチ性とモチ性の品種があることが知られている。阪本氏は他の植物についても調べ、7種のイネ科穀類（そのうち4種は雑穀のアワ、キビ、モロコシ、ハトムギ）のモチ性品種はすべてアジア東部（東アジア・東南アジア）にのみ分布し栽培されていることを解明した。不思議なことに、モチ性の穀類は、インド以西のユーラシア大陸、アフリカ大陸、南北両アメリカ大陸にはまったく見出されず、それらの地域に栽培されるイネ科穀類はすべてウルチ性の品種であった。そして、東南アジア大陸部のアッサム、ミャンマー北部、タイ北部・東北部、ベトナム北部、中国西南部を含む地域には、多種類のモチ性穀類が栽培され、そこにはさまざまなモチ性穀類を利用する食文化、すなわちモチ文化が見出せるため、「モチ文化起源センター」と名づけた。

以上のような、アフロ・ユーラシア地域の栽培植物に関する民族植物学的研究に加えて、阪本氏の学術コミュニティへの顕著な貢献としては、「民族自然誌研究会」の発足がある。第1回研究会（1995年10月）以来、「伝統に培われてきた先人のすばらしい知識や知恵を実証的に研究し、それらから多くのことを学ぶこと」を目的に、現在（2017年4月）まで86回を数える研究会として続いている。

「何はともあれ自分の足で歩いて研究材料を収集」するフィールドワークの価値と面白さ、また「種子から胃袋まで」といった調査範囲を広くとることの意義と研究活動の展開、ひいては、地域に根づいて地に足つけた生きざまそのものが、多くの人びとと若い世代のフィールドワーカーを魅了し続けている。

以上の理由から、選考委員会は大同生命地域研究賞の授与を決定した。

（大同生命地域研究賞 選考委員会）

2017年度
大同生命地域研究奨励賞

小島 敬裕 氏

(津田塾大学 学芸学部国際関係学科 准教授)

略 歴

小島 敬裕 (こじま たかひろ)

1. 現 職：津田塾大学学芸学部准教授
[勤務先電話番号 042 (342) 5155]
2. 最 終 学 歴：京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了 (2010 年)
3. 主 要 職 歴：2010 年 京都大学地域研究統合情報センター研究員
2014 年 京都大学東南アジア研究所日本学術振興会特別研究員 (PD)
2016 年 津田塾大学学芸学部准教授
現在に至る
4. 主な著書・論文：
 - ① “Mapping Theravada Buddhist Practices in Dehong, Yunnan, China” [Satoru Kobayashi, Yukio Hayashi, Hideo Sasagawa, and Miwa Takahashi (ed.) *Mapping Buddhist Cultures among Theravadin in Time and Space*, Center for Integrated Area Studies, Kyoto University, 2017]
 - ② “Script, Text, and Voice: Micro-Regional Connectedness in the Articulation of Palaung Buddhism in Northern Myanmar” [Toko Fujimoto and Takako Yamada (ed.) *Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness*, Senri Ethnological Studies 93, 2016]
 - ③ “Tai Buddhist Practices on the China-Myanmar Border” [Su-Ann Oh (ed.) *Myanmar’s Mountain and Maritime Borderscapes: Local Practices, Boundary-making and Figured Worlds*, 2016]
 - ④ 「ミャンマー上座仏教と日本人—戦前から戦後にかけての交流と断絶」 [大澤広嗣編『仏教をめぐる日本と東南アジア地域』勉誠出版、2016 年]
 - ⑤ 「山地民パラウンの越境と仏教実践の独自性—ミャンマー・シャン州ナムサン周辺地域の事例から」 [『東南アジア研究』53(1)、2015 年]
 - ⑥ 「中国・ミャンマー国境地域における仏教実践の再構築—文革後における徳宏タイ族の越境と地域に根ざす実践の動態」 [藤本透子編『現代アジアの宗教—社会主義を経た地域を読む』春風社、2015 年]
 - ⑦ 「中国・ミャンマー国境地域における徳宏タイ族仏教徒の人生と姓名」 [『マテシス・ユニヴェルサリス』16(2)、2015 年]
 - ⑧ 『移動と宗教実践—地域社会の動態に関する比較研究』 (編著) [京都大学地域研究統合情報センター、2015 年]
 - ⑨ 『国境と仏教実践—中国・ミャンマー境域における上座仏教徒社会の民族誌』 [京都大学学術出版会、2014 年]
 - ⑩ “From Tea to Temples and Texts: Transformation of the Interfaces of Upland-Lowland Interaction on the China-Myanmar Border” [*Southeast Asian Studies* 2(1), 2013]
 - ⑪ “Tai Buddhist Practices in Dehong Prefecture, Yunnan, China” [*Southeast Asian Studies* 1(3), 2012]
 - ⑫ 『中国・ミャンマー国境地域の仏教実践—徳宏タイ族の上座仏教と地域社会』 [風響社、2011 年]
 - ⑬ 「徳宏地域の実践仏教」 [奈良康明・下田正弘編『静と動の仏教—新アジア仏教史 04. スリランカ・東南アジア』佼成出版社、2011 年]
 - ⑭ 「中国雲南省徳宏州における上座仏教—戒律の解釈と実践をめぐって」 [『パーリ学仏教文化学』23、2009 年]

- ⑮「現代ミャンマーにおける仏教の制度化と〈境域〉の実践」〔林行夫編『〈境域〉の実践宗教—大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジー』京都大学学術出版会、2009年〕

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考：2010年 博士（地域研究、京都大学）

業績紹介

「東南アジア上座仏教文化の地域間比較研究」に対して

小島敬裕氏は、今日世界で2億人近い上座（テーラワーダ）仏教徒の宗教と社会を対象とする地域研究に携わる研究者である。ミャンマーで出家した経緯もあり、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科進学後は、同国でのフィールドワークを継続し、博士予備論文（修士論文に相当）で同国の上座仏教の実践と法制度について詳細なモノグラフを上梓した。（「現代ミャンマーにおける仏教と国家―「1980年全宗派合同会議」後の制度化の現実」2005年）

その後、ミャンマーと中国との国境地域にある雲南省徳宏州のタイ族集落で長期定着調査を行い、同地域での上座仏教徒の宗教実践と社会変化の様態を明らかにした。（博士論文「中国雲南省における徳宏タイ族の宗教と社会―国境地域の仏教徒の実践をめぐって」2010年）

近年では、ミャンマー上座仏教徒と日本との歴史的な関わりについて、両国の史資料やインタビューを通して双方向的な分析を試み、複数国を跨ぐ仏教実践の動態を解明するパイオニア的な業績を重ねている。

小島氏の研究業績のきわだった特徴は、以下の三点にまとめられる。

第一に、国境を跨る地域での定着調査研究を実現した点である。従来の東南アジア大陸部の上座仏教徒社会研究は、一国を単位とするものが中心だったが、現実の仏教徒の実践は、歴史的に地域や国境を越えて築かれている。戦後の冷戦体制下では、そうした局面を実証的に解明するフィールドワークは実現できなかった。また、国境周辺地域の住民のあいだでは複数の言語が使われており、仏教実践を人々の暮らしの内側から理解するためには複数の現地語を習得する必要がある。すでに中国語とミャンマー語に習熟していた小島氏は、ミャンマー＝中国国境地域の徳宏タイ語も習得することで、ミャンマー語、中国語、徳宏タイ語を駆使したフィールドワークをなしとげた。さらに、その前提として、政治的にセンシティブな国境地域で外国人研究者が調査許可を得るためには複雑かつ忍耐強い交渉が必要となるが、同氏は卓抜した現地語の運用能力、それに基づく誠実かつ真摯なるコミュニケーション能力をもって、関連機関の関係者との信頼関係を構築して実現させた。その結果、従来未踏の地域での上座仏教徒の宗教と社会についての民族誌的資料を収集して先行研究の欠落を補ったのみならず、出家者の存在を不可欠とする、これまでの上座仏教徒社会論にたいし、在家の儀礼専門家が日常的な宗教実践で中心的役割を果たしている現実を具体的に明らかにした。この学術的貢献はたいへん大きい。

第二の特徴は、国境地域における宗教実践の動態を、地域社会や複数の国家間の位相において捉える点である。小島氏はまず、中国側の徳宏タイ族による仏教実践の担い手の多くが

ミャンマー側からの越境者であることを悉皆調査で実証した上で、国境地域の仏教に変化をもたらす人やモノの移動と、中国・ミャンマー両国の政策や地域の経済変化との関係性を明らかにした。こうした複数の国家を跨ぐ実証的な研究は、生活をともにしたフィールドワークに加え、複数言語による浩瀚かつ領域横断的な文献の渉猟が必要であり、地域研究の新たな地平を拓くものである。

第三に、国境を越える仏教徒のネットワークや出家行動の東南アジア大陸部の他地域との異同について、地域情報学の手法を援用した地域間比較研究を行った点である。徳宏の上座仏教が、歴史的にミャンマーとのネットワークを維持してきたことは、すでに先行研究でも指摘されてきた。しかし出家者の具体的な移動経路や、仏教徒の出家・還俗パターンの他地域との共通性・相違点については明らかにされてこなかった。小島氏は、瑞麗市内の仏教関係全施設において、出家者・在家修行者に対する悉皆調査を実施し、その移動経路を地図上にマッピングするとともに、ライフヒストリーをチャート化した。それに基づいて上座仏教徒社会の他地域との比較研究を行った結果、移動パターンの地域差や、出家行動の他地域との異同を可視化することに成功した。

以上の研究は、モノグラフ『国境と仏教実践—中国・ミャンマー境域における上座仏教徒社会の民族誌』（京都大学学術出版会、2014年）としてまとめられ、高い評価を得ている。

そして近年では、山地民と平地民の仏教実践を媒介とする関係に着目した研究（「山地民パラウンの越境と仏教実践の独自性—ミャンマー・シャン州ナムサン周辺地域の事例から」『東南アジア研究』53巻 1号、9-43頁、2015年など）や、戦前から戦後にかけてのミャンマーと日本の仏教徒の交流と断絶について、両国での調査と文献から、仏教についての相互の認識と実践の相違を浮き彫りにする研究（「ミャンマー上座仏教と日本人—戦前から戦後にかけての交流と断絶」大澤広嗣編『仏教をめぐる日本と東南アジア地域』勉誠出版、43-64頁、2016年）に取り組んでいる。いずれもこれまで十分に解明されてこなかった課題であり、今後の展開が期待される。

これらの個人研究のほか、複数の科研プロジェクトに参加して分担者として貢献するとともに、対象地域や学問分野を越えた研究者との共同研究を組織してその成果を公刊している。（小島敬裕編『移動と宗教実践—地域社会の動態に関する比較研究』京都大学地域研究統合情報センター、2015年）

国内学会においては、東南アジア学会の委員として貢献しているほか、国際学会でも積極的に発表を行い、着実に業績を重ねている。（*Tai Buddhist Practices in Dehong Prefecture, Yunnan, China. Southeast Asian Studies* 1(3). pp. 395-430, 2012など）

以上の業績から、小島氏は非凡にして堅実、かつ誠実な地域研究者スピリッツを継承した人物であり、日本の地域研究を牽引するホープであると評価でき、大同生命地域研究奨励賞にふさわしい研究者として選考した。

（大同生命地域研究賞 選考委員会）

2017年度
大同生命地域研究奨励賞

高田 明 氏

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授)

略 歴

高田 明 (たかだ あきら)

1. 現 職：京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
[勤務先電話番号 075 (753) 7809]
2. 最 終 学 歴：京都大学大学院人間 環境学研究科 研究指導認定退学 (2002 年)
3. 主 要 職 歴：1998 年 日本学術振興会特別研究員 (DC1)
2002 年 日本学術振興会特別研究員 (PD)
2004 年 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助手
2007 年 同上 助教
2009 年 同上 准教授
現在に至る
4. 主な著書・論文：
 - ① 「南西アフリカ (ナミビア) 北中部のサンの定住化・キリスト教化」池谷和信 (編) 『狩猟採集民からみた地球環境史：自然・隣人・文明との共生』〔東京：東京大学出版会, pp.203-216, 2017〕
 - ② 「再演される出産：ボツワナにおける再定住政策と異常出産の治療儀礼」松岡悦子 (編) 『子どもを産む・家族をつくる人類学：オールタナティブへの誘い』〔東京：勉誠出版, pp.185-209, 2017〕
 - ③ Special Issue: Natural history of communication among the Central Kalahari San. *African Study Monographs, Supplementary Issue*, 52, 1-187 (編著), 2016.
 - ④ Education and learning during social situations among the Central Kalahari San. In H. Terashima & B. S. Hewlett (Eds.), *Social learning and innovation in contemporary hunter-gatherers: Evolutionary and ethnographic perspectives*. Tokyo: Springer (pp.97-111), 2016.
 - ⑤ Unfolding cultural meanings: Wayfinding practices among the San of the Central Kalahari. In W. Lovis & R. Whallon (Eds.), *Marking the Land: Hunter-gatherer creation of meaning in their environment*. New York: Routledge (pp.180-200), 2016.
 - ⑥ *Narratives on San ethnicity: The cultural and ecological foundations of lifeworld among the !Xun of north-central Namibia*. Kyoto/ Melbourne: Kyoto University Press & Trans Pacific Press, xviii, 198 p., 2015.
 - ⑦ 「ゴフマンのクラフトワーク：その言語人類学における遺産」中河伸俊・渡辺克典 (編) 『触発するゴフマン：やりとりの秩序の社会学』〔東京：新曜社, pp.229-255, 2015〕
 - ⑧ Special Issue: Exploring African potentials: The dynamics of action, living strategy, and social order in Southern Africa. *MILA - A Journal of the Institute of Anthropology, Gender and African Studies*, 12: iii-iv, 1-75 (Nyamongo, I., Teshirogi, K. との共編著), 2014.
 - ⑨ Kx' a Kinship classifications: A diachronic perspective. In A. Barnard, & G. Boden (Eds.), *Southern African Khoisan kinship systems*. Research in Khoisan Studies No. 30.

- (Boden, G.との共著) Cologne: Rüdiger Köppe Verlag Köln (pp. 141-160), 2014.
- ⑩ 「家族関係と子どもの発達：人類学的アプローチ」『乳幼児医学・心理学研究』23(1), 11-18, 2014.
 - ⑪ Kinship and caregiving practices among the Ekoka !Xun. In A. Barnard, & G. Boden (Eds.), *Southern African Khoisan kinship systems*. Research in Khoisan Studies No. 30. Cologne: Rüdiger Köppe Verlag Köln (pp. 99-120), 2014.
 - ⑫ 「ポスト狩猟採集社会と子どもの社会化」池口明子・佐藤廉也(編)『身体と生存の文化生態』〔滋賀：海青社, pp.225-249, 2014〕
 - ⑬ Surname and interethnic relationships among the Ekoka !Xun. In A. Barnard, & G. Boden (Eds.), *Southern African Khoisan kinship systems*. Research in Khoisan Studies No. 30. Cologne: Rüdiger Köppe Verlag Köln (pp. 223-240), 2014.
 - ⑭ Special Issue: Vitalizing indigenous knowledge in Africa. *African Study Monographs*, 34(3), 139-183 (編著), 2013.
 - ⑮ 「行為の堆積を知覚する：グイ／ガナのカラハリ砂漠における道探索実践」片岡邦好・池田桂子(編)『コミュニケーション能力の諸相：変移・共創・身体化』〔東京：ひつじ書房, pp.97-128, 2013〕
 - ⑯ 「ナミビアにおける教育改革についての一考察：オバンボランドのクンをめぐる教育実践」『アフリカ教育研究』4, 19-34, 2013.
 - ⑰ Pre-verbal infant-caregiver interaction. In A. Duranti, E. Ochs, & B. B. Schieffelin (Eds.), *The Handbook of language socialization*. Oxford: Blackwell (pp.56-80), 2012.
 - ⑱ 「親密な関係の形成と環境：ナミビア北中部のクン・サンにおける養育者-子ども間相互行為の分析から」西真如・木村周平・速水洋子(編)『講座 生存基盤論 第3巻, 人間圏の再構築：熱帯社会の潜在力』〔京都：京都大学学術出版会, pp.23-51, 2012〕
 - ⑲ Language contact and social change in North-Central Namibia: Socialization via singing and dancing activities among the !Xun San. In O. Hieda, C. König & H. Nakagawa (Eds.), *A Geographical Typology of African Languages: With special reference to Africa*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins (pp.251-267), 2011.
 - ⑳ 「転身の物語り：サン研究における「家族」再訪」『文化人類学』75(4), 551-573, 2011.

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備考：2003年 京都大学博士（人間・環境学）

業績紹介

「南部アフリカのサンにおける社会化と社会変化に関する研究」に対して

高田明氏は、南部アフリカの狩猟採集民・先住民として知られるサン（ブッシュマン）を主な対象として、フィールドワークにもとづく実証的研究を行っている優れた地域研究者である。

サンについては 20 世紀中頃から、その生業様式や社会構造、複雑な音韻構造をもつ言語、南部アフリカの政治的融和に果たした役割等に関して多くの優れた研究が行われてきた。

高田氏はこうした既存の豊富な調査資料の精緻な分析を踏まえたうえで、ボツワナとナミビアで通算 45 ヶ月間（2017 年 5 月現在）に及ぶフィールド調査を行い、「ミクロ」な実証的手法ともいえる新しい研究視点と分析方法でサン研究を発展させてきた。

高田氏の研究は、大きく分けて以下の 3 つの領域で行われてきた。

第一は、サンの養育者と子どもの間で見られる養育行動と発達、教育に関する研究である。この研究で同氏は、サンの学習にみられる文化的特徴を明らかにし、自然環境と生活様式、民俗知識、慣習的行為との関係性の理解に新しい視点を提示した。

第二は、サンの環境認識の特徴に関する研究である。この研究で、カラハリ砂漠の地形や植生と深く結びついたサンの環境認識の特徴を明らかにし、彼らが自然環境利用においていかに豊かな民族知識を活用しているかを明らかにした。

そして第三は、サンの集団と近隣の集団との関わり方に関する研究である。サンの（諸）集団が他の集団と多面的に関わりながら彼らの文化的境界を維持してきた仕組みを歴史的に検討することで、半ば自明とされてきたサンの「民族」としての基盤について深い考察を行ってきた。

第一の研究では、1990 年代後半からフィールドで使用可能となった高性能な小型ビデオを用い、養育者と子ども間の言語使用、身体運動、ジェスチャーを中心にした相互行為の詳細な分析を行った。この研究で、サンの養育において大人が乳幼児の行動を制限する躰けといったものはほとんどなく、年少の子どもたちが年長の子供たちとの遊びの中で主体的に応用可能性の高い知識や技術を身につけていく過程を明らかにし、第二の研究テーマである、環境認識や狩猟技術を含む民族知識の伝播・伝承のあり方に新しい分析視角を提供することとなった。

高田氏のミクロで精緻な実証的研究による成果は、人類進化に関わる平等分配論の議論

に引きずられ光が当てられることの少なかった狩猟採集民社会の文化的多様性という側面に焦点を当てることを可能にした。これは現代のサン社会が近代国家の中で直面している問題の理解にとって重要である。サンが住むナミビアとボツワナの両国政府は、国民意識の醸成をねらった統合政策を進めている。だがこれらの政策はむしろサン社会内部およびサンと他の諸民族の間の違いを意識させ、様々なあつれきを引き起こすことが危惧されている。この問題の理解にとって、サン社会の多様性を包含する新しい地域論が必要であるといえ、この点に関して彼の第三の研究は重要である。

以上の研究を高田氏は様々な研究の代表者として推進してきた。科研費若手S「養育者—子ども間相互行為における責任の文化的形成(2007～2011年度)」、科研費基盤A(一般)「教育・学習の文化的・生態学的基盤：リズム、模倣、交換の発達に関する人類学的研究(2012～2015年度)」、科研費基盤A(海外)「アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクトゾーンにおける景観形成の自然誌(2016～2020年度)」などである。

それらの研究成果は、2冊の単著、4冊の編著・共編著、49本の学術論文などを通じて公表されてきた。またこれらの成果に最近の研究成果も取り入れ、2018年度に米国・ニューヨークに拠点を置く代表的な学術出版社であるPalgrave Macmillan社からThe Ecology of Playful Childhoodという英文単著を出版する予定である。こうした研究成果は国内外で高く評価され、人類学や地域研究のトップジャーナルであるHunter Gatherer Research誌の編集委員、Current Anthropology誌でのコメンテータ、Palgrave Studies in Anthropology of Childhood and Youthシリーズの編集委員などを歴任し、若いながらもこの分野の研究発展に著しい貢献をなしている。

以上のような高田氏の旺盛な学術活動や優れた研究成果を高く評価し、さらにアフリカ地域研究の新たな展開を担う人材としての今後のさらなる活躍を期待して、大同生命地域研究奨励賞にふさわしい研究者として選考した。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

2017年度
大同生命地域研究奨励賞

ティムール ダダバエフ 氏
(筑波大学 人文社会系 准教授)

略 歴

ティムール ダダバエフ

1. 現 職：筑波大学人文社会系 准教授
2. 最 終 学 歴：立命館大学国際関係研究科 博士後期課程修了（2001年）
3. 主 要 職 歴：2002年 日本学術振興会外国人特別研究員（国立民族学博物館）
2004年 東京大学東洋文化研究所助教授
2006年 筑波大学人文社会科学研究所国際政治経済専攻助教授
2008年 筑波大学人文社会系准教授
現在に至る
4. 主な著書・論文：
 - ① *Social Capital Construction in Post-Soviet Central Asia*, with Tsujinaka Yutaka and Murod Ismailov, NY: Palgrave Macmillan. 2017年、共編著。
 - ② *Kazakhstan, Kyrgyzstan, and Uzbekistan: Life and Politics during the Soviet Era*, Co-edited with Hisao Komatsu, NY: Palgrave Macmillan. 2017年、共編著。
 - ③ *Japan in Central Asia: Engagement, Strategies and Neighboring Powers*, New York: Palgrave Macmillan. 2016年、単著。
 - ④ *Identity and Memory in Post-Soviet Central Asia*, Oxon: Routledge. 2015年、単著。
 - ⑤ 『中央アジアの国際関係』、東京大学出版会、2014年2月、単著。
 - ⑥ *Central Eurasian Studies: Past, Present and Future*, Istanbul: Maltepe University, 共編著。2011年、共編著。
 - ⑦ 『記憶の中のソ連』、筑波大学出版会、2010年、単著。
 - ⑧ 『社会主義後のウズベキスタン』、アジア経済研究所、2008年、単著。
 - ⑨ 『躍動するアジアの信念と価値観』、明石書店、猪口孝、田中明彦、園田茂人と共編著。2007年、共編著。
 - ⑩ 『マハッラの実像』東京大学出版会、2006年、単著。
 - ⑪ 『アジア都市部の価値観とライフ・スタイル』明石書店、猪口孝、田中明彦と共編著。2005年、共編著。
 - ⑫ *Values and Life Styles in Urban Asia*, Mexico: SIGLO XXI Editors, 2005年共編著。
 - ⑬ *Towards Post-Soviet Central Asian Regional Integration*, Tokyo: Akashi, 2004年、単著。

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考：2001年 国際関係学博士（立命館大学）

業績紹介

「中央アジア地域における社会主義後の政治、アイデンティティ、
社会の変容に関する研究」に対して

ダダバエフ氏は、国費留学生として立命館大学において学び、その後、国立民族学博物館や東京大学などを歴任し、現在、筑波大学で准教授を勤めている。専門分野は中央アジアを対象とする国際関係論であり、現地社会の政治、民族、宗教に関する論文を数多く執筆している。

ダダバエフ氏の研究の特色は、何よりも、社会主義以後の中央アジア諸国に関する国際関係論を、現地社会に内在する歴史的・文化的特徴と積極的に結びつけ、地域全体の持続的な発展と社会的な安定を模索してきた点にある。また、文化に対する深い洞察力に加えて、母語のウズベク語はもとより、英語・ロシア語・日本語の能力を活かした国際発信力の高さは刮目すべきものがある。

これまで、暴力とそのディスコースに関する研究の多くは、軍事的な介入をはじめとする軍事的な紛争解決から平和維持を追求しがちであるのに対して、地元出身の同氏はあくまでも平和的な紛争予防解決を希求する。例えば、1989年のフェルガナ事件（トルク・メセヘティン人対ウズベク人）、1990年のオシュ事件（キルギス人対ウズベク人）、1992-97年のタジキスタン内戦などを取り上げ、ウプサラ大学紛争解決学部（1999年）、国連大学（2000年）、UNESCO小渕恵三基金とトヨタ財団（2001年-2002年）、国立民族学博物館（2002年-2004年）から助成を受け、伝統的に民族間で共有されてきた社会的空間（在住コミュニティなど）が民族間対話の手段になりうることを指摘してきた。

さらに、ダダバエフ氏は中央アジア地域が直面している様々な争いや問題を「国家」や「政府」といった単位のみで解決するのは困難であると指摘し、「国家間関係」に加えて、一般国民の歴史や地域についての認識や地域としての共通のアイデンティティに着目することによって、中央アジア地域全体の潜在能力と統一感を高める必要を強調してきた。と同時に、同氏はローカルなアクターの役割が重要であることを訴え、コミュニティ・レベルでの共存のメカニズムならびに政府と地域共同体との関係も研究してきた。例えば、国際連合大学の秋野豊フェロシップ（2004年-2005年）、東京大学東洋文化研究所そして東京大学AGS研究会研究助成を受け、その成果を『マハッラの実像』（東京大学出版会、2006）、『社会主義後のウズベキスタン』（アジア経済研究所、2008年）、『記憶の中のソ連』（筑波大学出版会、2010）にまとめている。

以上のように、ダダバエフ氏は、中央アジアの国際関係の現状と課題について、国家間

とローカルなアクターの双方の役割に注目し、中央アジアの国際関係のメカニズムとその動向、そしてこれらの新独立国家の国際社会とのかかわりの事例研究を積み上げている。

近年では、上述のような研究を継続しながら、中央アジア地域における水・領土問題にみる地域統合の可能性、そのためのユーラシア共同体、上海協力機構（SCO）、中央アジアプラス日本といった国際的な協力体制を分析し、『中央アジアにおける国際関係』（東京大学出版会、2014年）、『Japan in Central Asia（NY: Palgrave, 2015年）』などを刊行した。

さらに、社会主義時代に対する一般の人々の記憶の記録化と分析にも従事しており、すでに研究書として『Identity and Memory in Post-Soviet Central Asia（Oxon: Routledge, 2015年）』、『Life and Politics during the Soviet Era, NY: Palgrave 2017年』、『Social Capital Construction and Governance in Central Asia, NY: Palgrave 2017年』多くの研究を刊行している。

また、比較の視座を用いながら中央アジア諸国の転換期における政策の形成過程を考察した英語（6冊）と日本語の研究書（6冊）を完成させ、数多くの研究論文をインパクトファクターの高い学術雑誌に投稿している。これらの出版物に対する国際的な評価は非常に高く、中央アジア地域における社会主義後の政治、人々の歴史認識やアイデンティティ、社会変容などに関する研究に大きく貢献している。

上述のような多面的な研究業績を通じて、中央アジアに関する日本社会における理解はもとより、日本の対中央アジア政策に関して諸外国における理解についても大きく寄与したことは特筆に値する。

なお、教育の面でも筑波大学において在籍する多くの学生の研究指導にとどまらず、中央アジアおよびロシア、ウクライナ、モンゴルなどからの留学生を受け入れる中央ユーラシア国費特別選抜特別プログラムの責任者として、研究・生活指導を行っている。

すでに、同氏のこれまでの研究・教育活動は高い評価を受けており、佐藤栄作賞（2003年）、筑波大学人文社会研究科若手研究賞（2015年）と筑波大学 BEST Faculty Member 賞（2016年）を受賞している。

以上のようなティムール・ダダバエフ氏の研究能力や学術活動の実行力などを高く評価し、さらにまた中央アジア地域研究の新たな展開を期待して、大同生命地域研究奨励賞にふさわしい研究者として選考した。

（大同生命地域研究賞 選考委員会）

2017年度
大同生命地域研究特別賞

畑中 幸子 氏
(中部大学 名誉教授)

略 歴

畑中 幸子（はたなか さちこ）

1. 現 職：中部大学名誉教授
2. 最終学歴：東京大学大学院社会学系研究科、文化人類学専門課程（1968年）
3. 主要職歴：1965年 Research associate of Harvard Yeng-Ching Institute
1968年 Research Fellow, Research School of Pacific Studies, Australian National University
1972年 Senior Fellow, Culture Learning Institute, East West Center, University of Hawaii
1973年 金沢大学法文学部助教授（文化人類学）
1981年 金沢大学文学部教授
1984年 中部大学国際関係学部教授
1991年 中部大学大学院国際関係学科教授
1994年 中部大学国際地域研究所所長
1999年 Visiting Professor, Vytautas Magnas University, Lithuania
2000年 中部大学名誉教授
現在に至る
4. 主な著書・論文：
 - ①『ニューギニアから石斧が消えていく日ー人類学者の回想録ー』明石書店、2013年
 - ②『リトアニアー民族の苦悩と栄光ー』（共著）中央公論新社、2006年
 - ③『地域研究入門』（共著）古今書院、2002年
 - ④『憎悪から和解へー地域紛争を考えるー』（峯陽一と共編著）京都大学出版会、2000年
 - ⑤『リトアニアー小国はいかに生き抜いたかー』NHKブックス、1996年
 - ⑥『ニューギニア高地社会』中央公論社、1981年
 - ⑦ *A Bibliography of Micronesia compiled from Japanese publications 1915-1945* 学習院大学東洋文化研究所、1979年
 - ⑧『われらチンブー ニューギニア高地人の生命力』三笠書房、1973年
 - ⑨『南太平洋の環礁にて』岩波新書 653、1967年
 - ⑩「バルト移民とエスニシティーアメリカのリトアニア人コミュニティ」『思想』8号、岩波書店、1992年
 - ⑪「パプアニューギニアにおけるカーゴカルトと社会運動」『民族文化の世界』下巻、小学館、1991年

- ⑫ The Dilemma of the South Pacific Islands—States, Tradition, Ethnicity. *Journal de la Société des Océanistes* 92-93, Paris
- ⑬ Ethnicity and Culture complex in the northern minorities. *Ethnicity and Ethnic groups in China* (共著)、New Asian Academic Bulletin vol.V1, special issue, HongKong, 1989
- ⑭ 「無文字社会の近代化」『歴史と社会』8、リポート、1988年
- ⑮ 「ニューギニア高地周縁部における neolithic trade」『民族学研究』50(2)、1985年
- ⑯ 「レアオ島とチャント」歴史的文化像 (共著) 新泉社、1980年
- ⑰ 「プカルア環礁における居住と人口動態」『季刊人類学』8(1)、1977年
- ⑱ 「調停者は誰か—ニューギニア高地における文化変容—」民族学研究 40(1)、1975年
- ⑲ Habitat, isolation and subsistence economy in the Central Range of New Guinea. *Oceania* 44(1), 1973年
- ⑳ Conflict of laws in a New Guinea Highland Society. *Man* 8(1), 1971年
- ㉑ The social organisation of a Polynesian atoll. *Journal de la Société des Océanistes*, TomXXV II (32-33), 1971年
- ㉒ Election and political consciousness in Chimbu Province. *Journal of the Papua New Guinea Society*, 1970年
- ㉓ 「プカルア環礁における社会・経済の変化」『民族学研究』31 (3): 203-216、1966年

以上のほか、論文多数

関係訳書

- 『サモアの思春期』(共訳) マーガレット・ミード著、蒼樹書房、1976年
- 『フィールドからの便り』マーガレット・ミード著、岩波書店、1984年
- 『ニューギニア紀行—19世紀ロシア人類学者の記録—』(共訳) ニコライ・ミクロホーマクライ著、1989年

5. 備 考 : 1968年 社会学博士 (東京大学)
- 2000年 リトアニア共和国から叙勲 : The Order of Lithuanian grand Duke Gediminas
 - 2001年 総合研究開発機構 (N I R A) 第二回大来政策研究賞
 - 『憎悪から和解へ—地域紛争を考える』(共訳) (京大学術出版会)

業績紹介

「オセアニア地域における長年にわたる文化人類学的調査研究と
地域住民支援の功績」に対して

畑中幸子氏は、日本におけるオセアニア研究のパイオニア的存在の一人である。東京大学大学院社会学研究科博士課程を終了後、オーストラリア国立大学高等研究所太平洋地域研究部や金沢大学文学部教授を経て、中部大学教授、中部大学国際地域研究所長、リトアニア国立ヴィタラタス・マグナス大学客員教授などを歴任され、現在は中部大学名誉教授である。

畑中氏は、1960年代前半に南太平洋のプカルア環礁（仏領ポリネシア）でフィールド調査を行って以来、ニューギニア高地やレアオ環礁（仏領ポリネシア）、ペロナ島（ソロモン諸島）など、いずれも外界から隔絶された社会に長期滞在して、文化人類学的調査を行ってきた。氏が発表した著書のうち、一般読者を対象に書かれた『南太平洋の環礁にて』（1967年岩波新書）は、多くの若い研究者の興味を喚起し、オセアニア研究を始めるきっかけを提供した点で高く評価されている。

1960年代後半には、ニューギニア高地（西セピック州）という、男性にとっても調査を実施するのは容易ではない地域での長期単独調査も行い、日本からニューギニア研究者をその後も多く輩出することにもつながった（『我らチンブー：ニューギニア高地人の生命力』（中公文庫 1974年）など）。氏の友人であった作家有吉佐和子が、調査中の氏を訪ねた紀行『女二人のニューギニア』（朝日新聞社 1969年、朝日文庫 1985年）を発表し、過酷な調査地の様子が一般に紹介されたことでも知られている。

他方で、世界的に著名なオセアニア研究者マーガレット・ミードの著作の翻訳出版も行い（『サモアの思春期』蒼樹書房 1976年（山本真鳥と共訳）；『フィールドからの手紙』（岩波現代選書）1980年岩波書店）、オセアニア研究の普及にも努めた。

1980年代後半からは、民族問題や難民問題へと興味を移し、独立を果たしたリトアニアで調査研究を行った。『リトアニア：小国はいかに生き抜いたか』（NHK ブックス、1996年）や『リトアニア 民族の苦悩と栄光』（ユオザスチェパイティスとの共著、中央公論新社 2006年）等の著作を通じて現代社会における民族問題を追求した。これら畑中氏のリトアニアにおける一連の研究に対して、2000年にリトアニア政府から文化勲章（The Order of Lithuanian Grand Duke Gediminas）が授与された。

近年は、再びニューギニア高地社会を訪れ、半世紀前の調査地を対象に研究を継続させ

ている。グローバル化に飲み込まれつつある社会の変化の様子を、当時の記録と対比させた分析を行い、『ニューギニアから石斧が消えていく日：人類学者の回想録』（明石書店 2013 年）を出版した。未発表の貴重な資料と共に、現代的な問題にも焦点をあてており、急速に貨幣経済へと変貌したパプアニューギニア社会において、伝統的な社会慣習がどのような形で残り、変化しつつあるかなどが鮮やかに描き出された。同時に、近代化の地域格差が生み出す数多くの難題も浮き彫りにされている。

なかでも、交通が極端に不便な内陸高地地域では、最低限の初等教育すら満足に実施されておらず、本来なら鉱山開発に伴って、開発主体から利益を得られる立場にある地域住民が、疎外・搾取される状態にあった。この状況を憂慮した畑中氏は、現地に小学校を建設するための援助活動をはじめた。日本の小学校に寄付を呼びかけ、学用品や中古衣類などをニューギニア内陸高地の部族社会の学童に届ける活動を行っている。氏の活動を通じて教育の重要性を認識した近隣の部族社会でも小学校が開設されるなど、その活動は広く実を結びつつある。

このような、畑中幸子氏の長年にわたるオセアニア地域研究および、ニューギニアの地域住民への多大なる貢献は、大同生命地域研究特別賞にふさわしいものと高く評価される。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)